

お寺でともに考えよう！

仏教ってなんだろう？

浄土真宗ってどんな教えなの？

阿弥陀仏ってどんな仏さまなの？

お念仏ってなんだろう？

なぜお参りするのだろう？

日々の暮らしのなかで、私たちは仏教や浄土真宗をどのように受け止めているのでしょうか。

お内仏に手を合わせたり、お寺にお参りに行ったりした時に、「なぜ仏さまに手を合わせるのだろう？」「仏さまって私たちにとってどのような存在なんだろう？」とふと疑問を持たれたことはないでしょうか。その疑問のなかに大切な問いかけがあるように思います。

そのような皆さんの疑問をもとに、仏教や浄土真宗の教えは、私たちに何を伝え私たちの何をあきらかにしてくれているのか、皆さんとともに学んでいきたいと思えます。

さんきえもん
三歸依文

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。
この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの
身を度せん。大衆もろともに、至心に三宝に歸依し奉るべし。

自ら仏に歸依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
大道を体解して、無上意を發さん。

自ら法に歸依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
深く経藏に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に歸依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、
大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し
受持することを得たり。願わくは如来の真實義を解したてまつらん。

真宗宗歌

一、ふかきみ法のりに

あいまつる

身みの幸さちなにに

たとうべき

ひたすら道みちを

聞きひらき

まことのみむね

いただかん

真宗各派協和会 作詞
島崎赤太郎 作曲

♩ = 60 *p*

ふ か き み の り に あ い ま つ る

mf *p*

み の さ ち な に た ど う べ き

mf

ひ た す ら み ち を き き ひ ら き

f *mf*

ま こ と の み む ね い た だ か ん

恩徳讃

(親鸞聖人和讃)

如来大に悲らのい恩だ徳いは

身みをこ粉こにしても報ほうずべし

師し主しゅ知ち識しきのお恩ん徳どくも

ほねをくだきてもしゃすべし

恩徳讃Ⅱ 沢康雄 作曲

♩ = 63

に よ ら い だ い ひ の お ん ど く は

mf *mp*

み を こ に し て も ほ う ず べ し

p

し し ゅ ち し き の お ん ど く も

f *mp*

ほ ね を く だ き て も し ゃ す べ し

目次

真宗宗歌・恩徳讃	1
第1回 仏教ってなんだろう？	
1 仏教とは？	3
2 仏教の起源は？	4
3 お釈迦さまの教えは？	5
4 私にとって仏教とは？	6
今回のキーワード「縁起」の道理	7
第2回 浄土真宗ってどんな教えなの？	
1 浄土真宗って仏教なの？	9
2 他の宗派と何か違うの？	10
3 親鸞聖人は何を大切にされたの？	11
4 他力ってなんだろう？	12
今回のキーワード「正信念仏偈」（正信偈）	13
第3回 阿弥陀仏ってどんな仏さまなの？	
1 私たちは何に手を合わせているの？	15
2 『大経』には何が説かれているの？	16
3 本願って何だろう？	17
4 凡夫って何だろう？	18
今回のキーワード お経（経典）	19
第4回 お念仏ってなんだろう？	
1 お念仏は誰のための教えなの？	21
2 『観経』には何が説かれているの？①	22
3 『観経』には何が説かれているの？②	23
4 お念仏するとどうなるの？	24
今回のキーワード 南無阿弥陀仏	25
第5回 なぜお参りするのだろう？	
1 本堂の荘厳は何をあらわしているの？	27
2 『阿弥陀経』には何が説かれているの？	28
3 本堂ってどんな場所だろう？	29
4 真宗門徒の生活って？	30
今回のキーワード お内仏（お仏壇）	31

第1回 仏教ってなんだろう？

1 仏教とは？ ■ お釈迦さまの教え

「仏教」と聞いて、どのようなことをイメージしますか？

- ・大切な人が亡くなった時の葬儀や法事の場面
- ・家のお内仏（お仏壇）や先祖のお墓参り
- ・歴史的なお寺への観光
- ・数ある宗教の中のひとつ など

そして、なんとなく大切そうだが難しくてよくわからないもの、あるいは、自分には無関係なもの、古臭いもの、特別なもの、大事なもの、と受け止める方もあるでしょう。仏教に対する見方やとらえ方は、その方のこれまでの経験や環境により千差万別です。

「仏教ってなんだろう？」という問いかけから、ひとつずつ一緒に考えていきたいと思います。

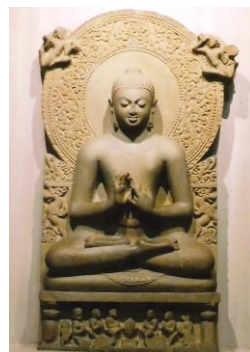


**仏教とは何かを一言で表すならば、仏(お釈迦さま)の説かれた教えです。
仏教は、インドにお生まれになられたお釈迦さまにはじまります。**

お釈迦さま(ゴータマ・シッタータ)

紀元前5～6世紀頃（今からおよそ2500年前）インドの北部で釈迦族の王子として生まれたお釈迦さまは、29歳の時に出家し、35歳で正覚（しょうがく 真実に目覚め）を得て、仏（ぶつだ 仏陀 = 目覚めた人、かくしゃ 覚者）と成られました。

そして、80歳で亡くなるまで45年間にわたり、各地方をめぐり多くの人々に教えを説いてまわられました。



お釈迦さま 初転法輪像
(インド サールナート)

2 仏教の起源は？

■ お釈迦さまの苦しみ悩み

お釈迦さまはなぜ出家（これまでの世俗せぞくの生活を捨て、道を求め歩みだすこと）されたのでしょうか？

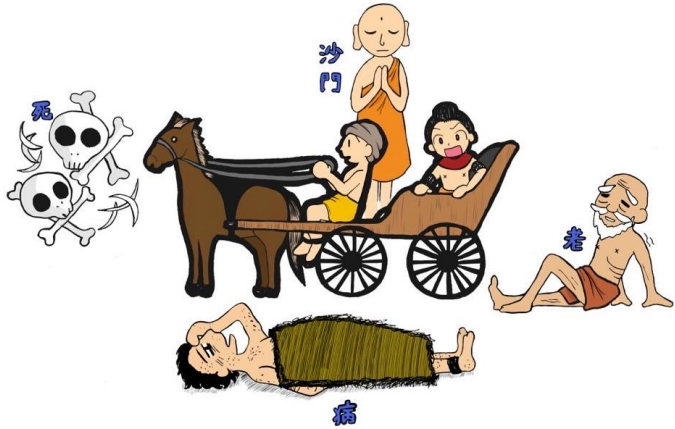
その動機はお釈迦さまの有名な逸話に表されています。

「四門出遊(しもんしゅつゆう)」の物語

お釈迦さまは、王子として生まれ、何不自由ない暮らしをおくっていました。

ある時、城外の暮らしを見たいと思った王子は、家来を連れ、東西南北の4つの門から出かけることにしました。

東の門から出かけた時には、腰は曲がり足元のおぼつかない老人に、南の門では道端に倒れている病人に出あい、西の門では葬列に遭遇しました。その姿を見た王子は驚いて、お城に戻り深く考え込んでしまいました。



「どんな人間も、老い、病み、いつかは死んでいかねばならない。

では、ここにこうして人と生まれたことの意味は何であるのか。」

最後に北門から出かけます。すると、出家した修行者に出会いました。大変質素な身なりだが凛とした穏やかな姿に心打たれた王子は、恵まれた地位と生活を捨て、出家されたのです。

お釈迦さまは、誰しもが抱える老病死の現実と直面し、日々の一時的な楽しみによって身の事実をごまかすことなく、その苦しみ悩みを自らの課題とされたのです。

Q. 私たちの人生における苦しみとは、どのようなものでしょうか？

苦(四苦八苦)

仏教では人生の根本的な苦である「生・老・病・死」を四苦といい、これに加え以下の四つの苦を合わせて八苦といいます。

- あいべつりく
・愛別離苦… 愛するものと別れる苦しみ
- おんぞうえく うら
・怨憎会苦… 怨み憎んでいるものと会わなければならない苦しみ
- ぐふとくく
・求不得苦… 求めるものが得られない苦しみ
- ごうんじょうく
・五蘊盛苦… 五蘊（身心を形成する要素）から生じる苦しみ

3 お釈迦さまの教えは？

■ 道理への目覚め

29歳で出家されたお釈迦さまは、6年間苦行生活をおくります。しかし、35歳の時にその苦行をやめ、菩提樹の下に座り瞑想し、正覚を得て仏陀になられます。

その正覚の内容は、この世のすべての物事は常に変化し、因（原因）と縁（条件）にしたがい、互いに関係をもって成り立っているという「縁起（えんぎ 因縁生起）」の道理であると言われています。



これ有るときかれ有り、これ生ずるよりかれ生ず。
これ無きときかれ無く、これ滅するよりかれ滅する。

『ウダーナ』より

お釈迦さまは、出家の動機となった老病死という苦しみの原因を「縁起」の道理によって見きわめ、人間が真実を知らないこと（むみょう 無明）にその原因があることを明らかにされました。

その後、亡くなられるまで日々色々な場でお釈迦さまは教えを説かれます。教えを説かれる目の前の方に応じて説き方はさまざまでしたが、それらに通底する教えは「縁起」の道理であったとされています。

「縁起」の道理を通して、私たちは関係性の中にありながら、自己中心的な思いや都合によって、他者との間そして自分自身に問題や苦しみを生み出していることを教えられています。

Q.あなたはどのような関係の中を生きていますか？

4 私にとって仏教とは？

■ 生きる燈^{ともしび}

お釈迦さまは、80歳で亡くなられるまで様々な地位や身分、境遇を生きる多くの人々に道理を説かれました。

そして、お釈迦さまの説く道理を自らへの教えとして聞いた人々は、その教えに生きる仏弟子となりました。

お釈迦さまが亡くなられた後、仏弟子たちが集まり、お釈迦さまによって教えられた教法（経）と生活規則（律）とが、集まった全員によって確認され、伝承されることになりました。

お釈迦さまの生涯を通して表された教えは、仏弟子たちひとりひとりの迷いのあり方を照らし出し、歩むべき道を示す燈となりました。

そして、その教えに生きられた無数の人々により、インドから中国・朝鮮半島・日本という国々と2500年という時を越えて、今ここにいる私にまで至り届いていません。

仏教の伝燈^{でんとう}とは、様々な時代社会の苦悩の現実のなかで教えが生きる燈となり、人から人へと伝えられてきたものです。

私たちにとって仏教は、高尚な理想ではなく、生活の現実に生きてはたらくものであることを、私たちに先だつ多くの方々がその歩みを通して証^{あかし}しているのです。



先師の言葉

経教はこれを喩^{たと}ふるに鏡のごとし (善導大師)

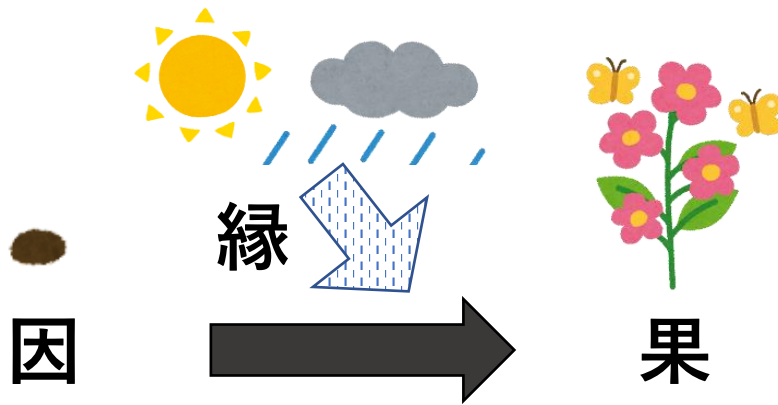
仏道をなろうというは、自己をなろうなり (道元禅師)

自己とは何ぞや 是れ人世の根本的問題なり (清沢満之)

「縁起」の道理

「縁起」は「因縁生起」を略したものです。「因」は物事が生じる「原因（内部条件）」、「縁」は因にかかわる「条件（外部条件）」、そして「生起」は因と縁によって生ずる「結果（果）」を意味します。

このことを花によって例えてみましょう。花の種を植えることによって花は咲きます。この時の種が「因（原因）」となり、花が咲くことが「果（結果）」となります。しかし、種をいつどこに植えるかや天気などの「縁（条件）」によって「生起」する結果は変わります。



種を植えるという「因」が同じでも、「縁」が異なれば、花が咲いたり枯れたり、芽が出ないなど「果」は変化します。したがって、物事を固定的、決定的にとらえることはできないのです。

そして、すべての物事は「因」と「縁」との関係によって成り立ち、同時にすべての物事は必ず他の物事の「因」とも、また「縁」ともなります。上の図でいえば、植えた種が何かの「縁」となり、またお日様や雨が何かの「因」となり、そして咲いた花や枯れた花が何かの「因」や「縁」となっていく。このような関係性の成り立ちを「縁起」という道理としてお釈迦さまは説かれたのです。

普段の生活の中で、「縁起が良い、縁起が悪い」などという言葉を使ったり、耳にすることがあります。しかし、縁起という言葉は数限りのない因と縁によって私が成り立っていることを教える言葉です。

お釈迦さまは、「縁起」の道理を通して、自分自身が当たり前に握りしめている「私」とは何か？人間にとっての苦しみは、老病死という現実にあるのではなく、私たちの固く握りしめている思いにその根本の原因があるのではないかと問いかけられています。

第2回 浄土真宗ってどんな教えなの？

1 浄土真宗って仏教なの？

■ お釈迦さまの教説

現在の日本には、天台宗や真言宗・浄土宗・臨済宗・曹洞宗・日蓮宗など多くの仏教の宗派が存在しています。浄土真宗もその一つに数えられます。

では、なぜ様々な宗派があるのでしょうか？

お釈迦さまは相手の資質や能力・状況に応じて、その人にとって相応しい^{ふさわ}教説を説かれました。これを「対機説法」^{たいきせっぽう}（機に対して法を説く）といいます。

お釈迦さまが亡くなられた後、そのようなご説法を聞いた仏弟子たちによって、まとめられたものが「お経」（経典）です。したがって、様々な内容の経典が数多く残されています。

そして、経典はインドから中国へと伝えられ、漢字へと翻訳され、朝鮮半島を経て日本へと伝来しました。

多くの経典のなかで、どのお経をよりどころとし、またどのように解釈するかによって、様々な宗派が成立したのです。

親鸞^{しんろう}聖人を宗祖と仰ぐ浄土真宗では「浄土三部経」と呼ばれる三つのお経を正依^{しょうえ}（正しく^{まさ}よるべき）の経典としています。

真宗(大谷派)の宗旨

- ご本尊 阿弥陀如来
- 正依の経典 浄土三部経
 - 『仏説無量寿経』 (大経)
 - 『仏説観無量寿経』 (観経)
 - 『仏説阿弥陀経』 (小経)
- 宗祖 ^{しんらんしょうにん}親鸞聖人
- 宗祖の著 顕浄土真実教行証文類 (教行信証)
^{けんじょうどしんじつきょうぎょうしょうもんるい}
- 日常のおつとめ (平常)
正信偈・念仏・和讃・回向・御文
- 宗派名 真宗大谷派
- 本山 ^{しんしゅうほんびょう}真宗本廟 (東本願寺) 京都



阿弥陀如来像 (阿弥陀堂)



真宗本廟 (御影堂)

2 他の宗派と何か違うの？

ろうしやうぜんあく

■ 老少善悪のひとをえらばれず

なぜ、僧侶なのに髪を伸ばしているのだろう？

浄土真宗のお寺にお参りされた時やご法事などで疑問に思われたことはないでしょうか。

一般的に僧侶というと、出家して厳しい修行をしたり、座禅をしたりするイメージを持たれているかと思います。実際、他の多くの宗派では戒律（修行者の生活規律）を守り、さとりを目指す修行が行われています。

親鸞聖人は生涯を通して、自らそしてあらゆる人にひらかれた仏道を求められました。その歩みから示される浄土真宗の特徴として、肉食妻帯・在家仏教といわれるものがあります。

にくじきさいたい
肉食妻帯・・・殺した生き物の肉を食べ、結婚して妻と家庭を持つこと
さいけふつきやう
在家仏教・・・在俗の生活を営み仏道を歩むこと

当時そして明治以前、浄土真宗以外の宗派では、僧侶が肉を食べ妻をめとることは、戒律で固く禁じられていました。また、出家して世俗の生活をすて、仏道修行に専念できる環境に身を置くことが基本でした。

けれども、親鸞聖人が求められたのは、厳しい修行をしたり、世間との交流を断って仏道を求めることではなく、あるがままの生活を営み仏道を歩いていくことでした。

その姿は一見すると墮落にも見えるかもしれませんが、しかし、仏教とは日常を離れた特別なものではなく、私たちが生きる日々の現実の中でこそ求められるものである。そのことを課題とし、歩まれたのが親鸞聖人です。

Q. 私たちは仏教に何を求めているのでしょうか？

親鸞聖人

親鸞聖人は、1173（承安^{じやうあん}3）年に京都に誕生し、平安時代から鎌倉時代にかけて生きられた方です。

9歳で出家され、20年間比叡山で厳しい修行と学問を積み重ねますが、山を下りる決心をし、吉水草庵をたずね法然上人と出遇われます。そして、本願念仏の教えに^{きえ}帰依されました。

老若男女・身分を問わず、あらゆる人に救いの道をひらくこの教えによって、多くの念仏者が生まれました。しかし、それまでの権威から強い反発を受け、法然上人は土佐へ、親鸞聖人は越後へ流罪となりました。

その後、聖人は関東に移り、その地で懸命に生きる人々と共に暮らし、本願念仏の教えを伝え続けていられました。京都に戻られた後、1262（弘長^{こうちやう}2）年11月28日、親鸞聖人は90年の生涯を終えられました。



親鸞聖人（安城御影）

3 親鸞聖人は何を大切にされたの？

念仏成仏これ真宗

親鸞聖人は、9歳から20年間比叡山で過ごされましたが、29歳の時に山を下りる決心をされました。なぜ、親鸞聖人は比叡山を下りられたのでしょうか。

比叡山の教えは、厳しい修行によって自分の力で^{ほんのう}煩惱を断ってさとりを開くという〈自力・聖道門〉の教えです。しかし、その教えにしたがいどれだけ修行に励んでも煩惱を断つどころか、苦しみや悩みが深まるばかりでした。比叡山での修行をやめ、山を下りた親鸞聖人が出遇われたのが法然上人です。親鸞聖人は、法然上人が説かれていた「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」という〈他力・浄土門〉の教えに生きられたのです。

宗祖親鸞聖人は、師である法然上人との出遇いをとおして、阿弥陀仏に帰依して「南無阿弥陀仏」と称えることが、すべての人に開かれた平等な救いの道であるといただかれました。

聖人は、生涯にわたる聞思のなかで『顕浄土真実教行証文類（教行信証）』を撰述し、その教えを「浄土真宗」と^{あきら}顕かにされました。浄土がまこと（真）のおね（宗）である、浄土こそがほんとうの依りどころであるということです。（東本願寺HPより）

自分の力ではさとりを開くことはできないと気づかれた親鸞聖人は、「本願を信じ、ただ念仏申せ」と伝えてくださった師の教えを大切にされ一生涯を通し聞き伝えていかれたのです。

親鸞聖人にとって「浄土真宗」とは、特定の宗派の名前ではなく、師によってあきらかにされた、自らの依りどころとなる真実の教えという意義を持つものです。

Q.何を大切に生きていますか？



法然上人（絵像）

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。（中略）

弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおわしまさば、善導の御釈、虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然のおおせそらごとならんや。法然のおおせまことならば、親鸞がもうすむね、またもって、むなしかるべからずそうろうか。

『^{たんにしやう}歎異抄』 第二条

4 他力ってなんだろう？

■ 他力ほんがんりきというのは如来の本願力なり

「他力」または「他力本願」という言葉を聞くと、他人をあてにして望みを叶えようとする、あるいは他人まかせにすることをイメージされるかもしれません。浄土真宗においては、本願念仏の教えを「他力」の教えといただいてきました。

普段の生活のなかで私たちは何をたよりとして生きているのでしょうか。これまで積み重ねてきた努力や経験・常識など、自らの思い（考え）や能力をたよりとしていたのではないのでしょうか。

自力じりきというのは、わがみをたのみ、わがころをたのみ、わがちからをはげみ、わがさまぜんごんの善根をたのむひとなり
『一念多念文意』いちねんたねんもんい

自らの力（自力）をたよりとして、思い通りにいった時には自分の成果と得意になり、思い通りにならない時には悩み苦しむ。そして思い通りにするためにときに他人（ひと）を傷つけることもあるのが私たちの姿ではないのでしょうか。

さるべき業縁ごうえんのもよおせば、いかなるふるまいもすべし 『歎異抄』第十三条

私たちがたよりとしている自らの力（自力）は、それほどあてになるものなのではないのでしょうか。

私たちは因縁によって様々な関係の中にある存在です。因（原因）と縁（条件）によって左右される身であるからこそ、自分の力をいくらたよりにしてみてもすべてを思い通りに果たし遂げていくことはできません。

自分の力と思っていたものもあらためて見つめてみると、自分一人によって備わったものは何ひとつありません。しかし、私たちはそのことに気づかず、自分の力と錯覚したものをあてにする心（自力の心）を強く持っています。

そのような「自力の心」をひるがえし、他者と共にある自身の存在の事実を目覚めさせるはたらき（阿弥陀仏の本願力）を「他力」としていただいてきたのです。

先師の言葉

あてにならぬことをあてにしているからふらふらである （曾我量深）

私を生かしておる力というものに帰っていく歩みそれが仏道（宮城顕）

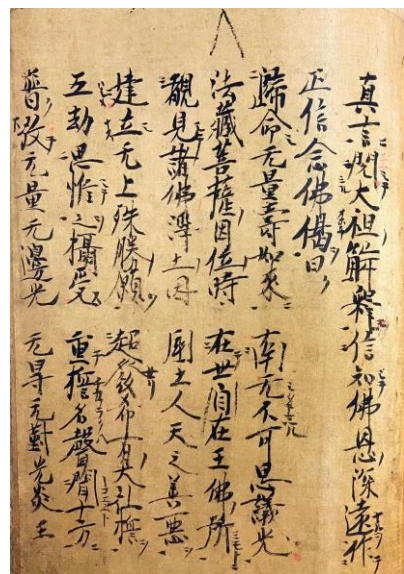
天命に安んじて人事を尽くす （清沢満之）

正信念仏偈(正信偈)

「正信偈」は、正式には「正信念仏偈」といい、親鸞聖人の主著である『教行信証』に記されています。親鸞聖人が受け取られた本願念仏の教えが偈頌という詩(うた)の形式で著されています。

「正信偈」は、真宗門徒が日ごろのおつとめに用いる聖教として、親鸞聖人の書かれたものの中でもっとも身近に親しまれてきました。

「正信偈」は、大きく分けて二つの内容からなっています。前半「難中之難無過斯」までは、お釈迦さまが阿弥陀仏の本願を説かれた『仏説無量寿経』に基づいて、「印度西天之論家」以降はお釈迦さまの教えを正しく受け止めてこられた七高僧の解釈をもとに著されています。お釈迦さまのお言葉と七高僧の解釈によって、仏の恩徳がまことに深いことが知らされたと讃えられています。



『教行信証』坂東本「正信偈」冒頭

「七高僧」

親鸞聖人が浄土真宗相承の祖師として敬われた、インド・中国・日本の七人の高僧。

「正信偈」や『高僧和讃』には、七高僧の徳が表されています。

- | | |
|----------------------|------------------------|
| インド：龍樹菩薩 (150-250年頃) | ・天親菩薩 (300-400年頃) |
| 中国：曇鸞大師 (476-542年) | ・道綽禪師 (562-645年) |
| 日本：源信僧都 (942-1017年) | ・源空(法然)上人 (1133-1212年) |

親鸞聖人は「正信偈」を通して、仏教を本願念仏の〈他力・浄土門〉の教えとして明らかにし世に弘められた方々に思いを至し、また私たちにその教えを伝え勧められています。

自らをたよりとしそれぞれに異なる境遇を生きる私たちに、いつでも、どこでも、どんな時も、誰にも、はたらきかけている願いがあるのだと教え示されています。

「聖道門」

この世で自己の修行の力量で、さとりを開こうとする教え。(自力・難行道)

「浄土門」

阿弥陀仏の本願力によって、浄土に生まれてさとりを開く教え。(他力・易行道)

第3回 阿弥陀仏ってどんな仏さまなの？

1 私たちは何に手を合わせているの？ 南無阿弥陀仏

浄土真宗の本堂やお内仏の中央に安置されているご本尊（本当に尊ぶべきもの・こと）は阿弥陀仏（阿弥陀さま）です。

第1回では、仏教は今からおよそ2500年前インド北部にお生まれになられたお釈迦さまにはじまることを学びました。

では、なぜご本尊は釈迦仏（お釈迦さま）ではないのでしょうか？

お釈迦さまは亡くなられる前に仏弟子に対して、お釈迦さま自身を頼りとし依存するのではなく、自ら（自己）と法（教説）をよりどころとして歩むことを教示されました。（じとうみょうほうとうみょう 自灯明法灯明 自らを灯明とし法を灯明とする）

そして、お釈迦さまがよるべき法として教説されたのが『仏説無量寿経』（大経）に表される阿弥陀仏です。

如来、世に興出したまうゆえは、ただ弥陀本願海を説かんとなり 『正信偈』

お釈迦さま（釈迦仏）も阿弥陀さま（阿弥陀仏）も、どちらも「仏」と呼ばれます。「仏」とは、ぶつだ かくしゃ 仏陀・覚者ともいい、真理に目覚めた者を意味します。

お釈迦さまも、真実の道理に目覚め、仏（如来）となりました。お釈迦さまは、自らも出遇われた阿弥陀仏の本願（真実のはたらき）によれと教えられているのです。

浄土真宗は一神教ではなく、「にそんぎょう 二尊教」であると言われます。

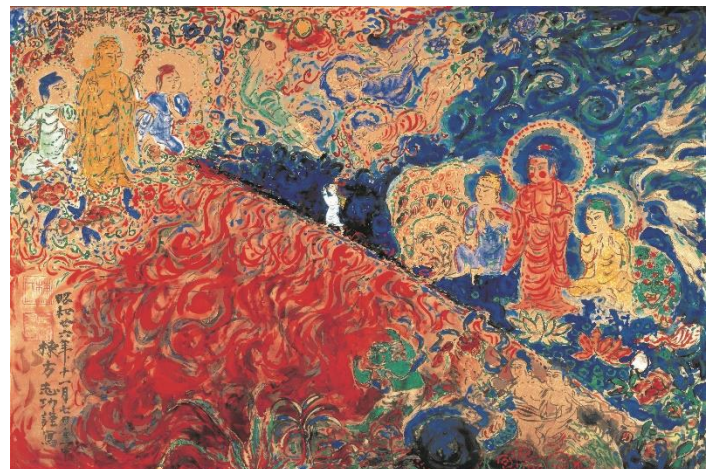
お釈迦さまと阿弥陀さま（二尊）は、同じ願いのもとに別々の役割を担われます。

お釈迦さま・・・きょうしゅ 教主（ぬし 教えの主）

お釈迦さまは、私たちの迷いのこの世にお生まれになり、阿弥陀さまの願いの世界である浄土をお示しになり、「ゆ 往け」と勧められます。（はつげん 釈迦の発遣）

阿弥陀さま・・・きゅうしゅ 救主（すけ 救いの主）

阿弥陀さまは、浄土から「南無阿弥陀仏」のお念仏の声となって、「き 来たれ」と私たちを招き呼び続けてくださっています。（しょうかん 弥陀の招喚）



おんにがびやくどうのさく
「御二河白道之柵」棟方志功作

2 『大経』には何が説かれているの？

■ 真実の教

親鸞聖人が「真実の教」といって勧められた『仏説無量寿経』（大経）は、浄土真宗においてご法事場で勤められることもあり、真宗門徒の方なら聴かれたことがあるのではないかと思います。

では、『大経』はどのような経典で、何が説かれているのでしょうか？



『大経』は上下二巻からなる経典です。古代インドの言葉であるサンスクリット語（梵語）では「Sukhāvātī-vyūha」（スカーバティー・ビューハ）^{しょうこん}といい、「極楽の莊嚴」を意味します。

このお経は、^{おうしゃじょう}王舎城の^{ぎしゃくっせん}耆闍崛山において、ひときわ気高く輝き尊いお釈迦さまの姿に驚いた阿難の問いをきっかけとして説きはじめられます。

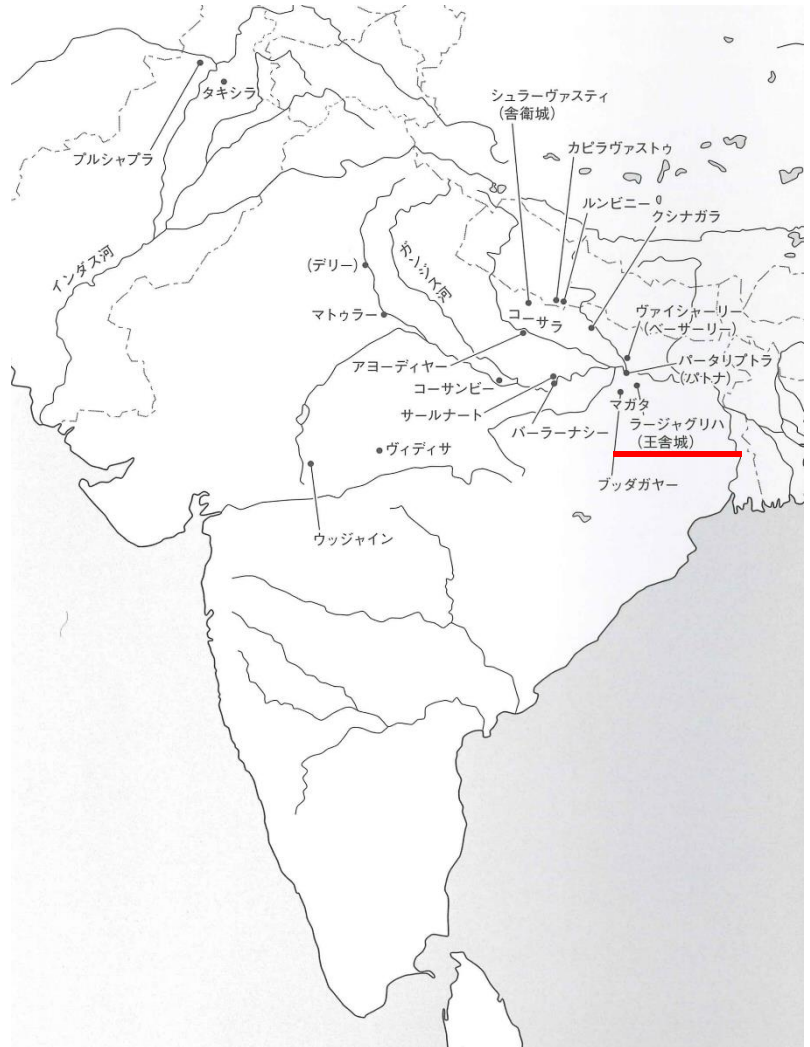
上巻

一人の国王が^{せじざいおうぶつ}世自在王仏と出遇い、^{ほうぞうぼさつ}法蔵菩薩となって本願をおこし、極楽浄土を建立するまでの発心と修行、浄土の莊嚴が表されています。法蔵菩薩がすべての人々を救う阿弥陀仏となられるありさまが物語として説かれています。

下巻

阿弥陀仏の願いが^{じょうじゆ}成就していることが説かれ、衆生は阿弥陀仏の本願を信じ、^{しゆじよう}念仏することにより往生が定まることが述べられています。

そして、将来すべての教えが滅びても、この経だけは残り人々を救い続けると説かれています。



3 本願って何だろう？

せつしゆふしや
攝取不捨

『大経』には阿弥陀仏の本願が説かれています。その本願とは、どのような願いなのでしょう？

本願は、菩薩が衆生を救済する仏となるためにおこした誓願を意味します。

『大経』では、法蔵菩薩の物語として表されています。



はるか昔、世自在王仏という仏さまがおられました。その時、一人の国王がおられました。国王は、世自在王仏に出会い、自らも仏となって世の人びとを悩み・苦しみから救いたいと願うようになられます。そして、国王の地位を棄てて、法蔵という名の菩薩（自らのさとりを求め、他を教化する者）となられたのです。

世自在王仏は、法蔵菩薩の求めに応じて、数多くの仏の浄土の成り立ちと、そこにいる人びとの善悪のありさまをつぶさにお示しになりました。

法蔵菩薩は、それらの浄土のありさまを拝見された後、五劫ごこうという途方もなく永い期間にわたって思惟しゆいを重ね、「どのような者であっても自分の浄土におさ摂め取って決して見捨てることはない」という、この上ない願い（本願）をおこされました。そして、その願いを48項目（四十八願）に分け、それが成就しないのであれば決して自らは仏にならないと誓われたのです。



阿弥陀仏は、法蔵菩薩の本願が成就し、仏となったお姿です。そして、阿弥陀仏は「南無阿弥陀仏」とわが名を称えなさいと呼びかけてくださっています。



この物語では、願いをおこし仏となるまでの阿弥陀仏の背景が語られています。そこには、どのような存在も摂め取り決して見捨てることのない深く広い願いが表されています。そしてその願いは、現にいまここにいる私たちにはたらきかけているのです。

Q.物語を通して、何を伝えようとしているのでしょうか？

法蔵菩薩の因位の時、世自在王仏の所にましまして、
諸仏の浄土の因、国土人天の善悪を親見して、
無上殊勝の願を建立し、希有の大弘誓を超発せり。
五劫、これを思惟して摂受す。重ねて誓うらくは、名声十方に聞こえんと。

『正信偈』

4 凡夫って何だろう？

「凡夫」は、すなわち、われらなり

『大経』上巻には、すべての者を必ず救うと誓われた阿弥陀仏の本願が説かれています。では、その対象である私たちはどのような在り方をしているのでしょうか？

お寺にお参りして煩惱をなくすとか、除夜の鐘を撞いて煩惱をはらうなどと言われることがあります。

仏教では、煩惱を抱えて生きる人間のことを凡夫と表現してきました。『大経』下巻には、そのような衆生（私たち）の姿がこと細かに説かれています。その中心的な課題として「三毒の煩惱」と言われる根本的な煩惱があげられています。

とんよく
貪欲

(むさぼり求める心)

財産が有る者も無い者も今の自分に満足しない。
どんな者も求め悩む衆生の姿。

しんに
瞋恚

(憎しみ怒る心)

争いの心が起こり、怒り憎むことがある。
その心が大きくなり、お互いに争い合う衆生の姿。

ぐち むみょう
愚癡（無明）

(おろかで事理の分別がないこと)

欲望に惑わされ、怒り憎み苦しんでいる。
愚かさや疑惑におおわれ、そのような自分を見つめることができない衆生の姿。

自己中心的な欲望や執着心を持ちながら、しかもその欲望を抱えていることに気づくことすらできない私たち人間の愚かさが説かれています。

浄土真宗では、煩惱は決して無くならない、煩惱に満ちている身であるからこそ、阿弥陀仏は本願をおこされたのだと教えられます。「どのような者であっても摂め取って決して見捨てることはない」と誓う阿弥陀仏の願いにうなずくところに、煩惱を抱え背きあい生きる私たちに、自他ともに歩む道がひらかれるのです。

凡夫というのは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおおく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむころもおおく、ひまなくして臨終の一念にいたるまでとどまらず、きえず、たえず
『一念多念文意』

先師の言葉

我必ず^{ひじり}聖に非ず。彼必ず^{あら}愚かに非ず。共に是れ^{ただひと}凡夫ならくのみ。(聖徳太子)

えらばず きらわず みすてず (竹中智秀)

お経（経典）

お釈迦さまの教説は「我聞如是」（我聞きたまえき かくのごとき）と、仏弟子によって口伝えに伝承されました。そして語り伝えるなかで文字に起こされ、形づくられたものがお経（経典）です。

ほとんどの経典では、その経典が成立するための六つの事がら（六事）が初めに記されます。いつ、誰が、どこで、誰に向かって説いたものか、それをこのように間違いなく聞きとったという事が示されています。

この六事を満たして初めて説かれることから「六成就^{ろくじょうじゅ}」とも呼ばれます。

『大経』の初めは以下の通りです。

がもん **によぜ** **いちじ** **ぶつ**
「我聞 如是 一時 仏

じゅおうしゃじょうぎしゃくっせんじゅ **よだいびくしゅまんにせんになんく**
住王舎城耆闍崛山中 与大比丘衆万二千人俱……」

われききたまえき **かくのごとき** **ひととき** **ぶつ**
おうしゃじょうぎしゃくっせんのうちじゅうしたまいき
だいびくしゅまんにせんになんとともなりき……

- ①**我聞**（聞成就）：聞かせていただいた
- ②**如是**（信成就）：仏が説かれたことをこのように
- ③**一時**（時成就）：説かれた時
- ④**仏**（主成就）：説いた者
- ⑤**住王舎城耆闍崛山中**（処成就）：説かれた場所
- ⑥**与大比丘衆万二千人俱…**（衆成就）：聴聞者（誰に向かって説かれた）

『大経』は、阿難の問いかけをきっかけとして教えが説かれます。

阿難は侍者としてお釈迦さまに仕え、常に説法を聴いていたことから「多聞第一」と称される仏弟子でした。しかし、阿難はお釈迦さま在世の間には、煩惱を断じ尽くしてさとりを得ることがついにできなかったと言われています。

そのような凡夫である阿難がお釈迦さまに光を見いだしたことから、お釈迦さま個人を超えてはたらく普遍の法が、阿弥陀仏の本願として説き述べられます。ここに、その教えが限られた時の特別な人のためのものではなく、いつでもどのような者にもひらかれたものであることが顕かにされているのでしょう。

メモ

第4回 お念仏ってなんだろう？

1 お念仏は誰のための教えなの？

ざいあくじんじゅうぼんのうしじょう しゅじょう
罪悪深重煩惱熾盛の衆生

家のお内仏やお墓の前、お寺の本堂などで手を合わせて「南無阿弥陀仏」と口に出されたこと（称名念仏）があると思います。

私たちは、どのような思いでお念仏申しているのでしょうか？

「阿弥陀さま、どうか私の願いをかなえてください。」

「阿弥陀さま、どうか私の悩みや苦しみをなくしてください。」

家族のため、先祖のため、自分のためと思いの先は色々あるかもしれませんが、自らの望みを仏さまにお願いすることがあるように思います。

お念仏とは、そのような私たちの願望を満たしてくれるものなのでしょうか？



みだ 願には老少善悪のひとをえられず。ただ信心を要とすとしるべし。
そのゆえは、罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします。

『歎異抄』第一条

前回、「南無阿弥陀仏」とは、「どのような者であっても握め取って決して見捨てることはない」という阿弥陀仏の願いが「南無阿弥陀仏」のお念仏の声となって名のり出たものであることを学びました。

では、その仏の願いは、どのような者に差し向けられたものでしょうか。

阿弥陀仏の願い（本願）とは、日々の現実のなかで悩み苦しむ者をこそ救おうとするものである、と親鸞聖人は教えられます。

聖人は、七高僧のお一人である源信僧都に依って、どこまでも自らの欲（思い）によって真実に背いていく者に阿弥陀仏の名号（「南無阿弥陀仏」）を称することを勧められているのです。

極重の悪人は、ただ仏を称すべし。我また、かの摂取の中にあれども、煩惱、
眼を障えて見たてまつらずといえども、大悲倦きことなく、常に我を照したまう、
といえり。

『正信偈』源信章

浄土真宗で正依の經典とされる「浄土三部經」のひとつである『仏説觀無量寿經』（觀經）は、現実に起きた事件によって深く悩み苦しむ韋提希という夫人の要請にこたえ、お釈迦さまが説かれたお經です。そこにはお釈迦さまの教説により、自らの思いを超えて阿弥陀仏の願いに出遇っていく一人の人間の姿が表されています。

2 『観経』には何が説かれているの？①

おうしゃじょう

王舎城の悲劇

『観経』のはじめには、「王舎城の悲劇」と言われる親と子の間で起こった身心を引き裂く悲しい事件が説かれます。お釈迦さま在世（今から2500年以上前）のことですが、現代の私たちも同様に抱える人間の問題性があきらかにされています。

お釈迦さま晩年のことです。マガダ国で、太子である息子が王である父を幽閉して殺し、王位を奪うという事件がありました。

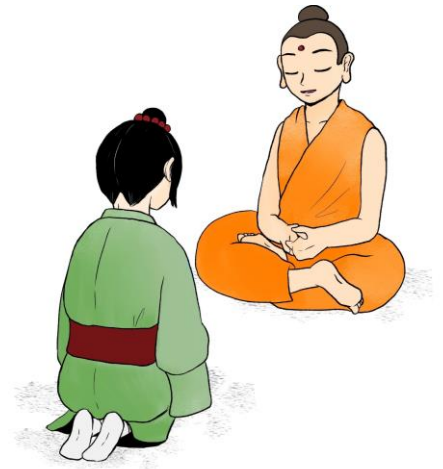
首都の王舎城に、王である頻婆娑羅^{びんばしやら}と妃である韋提希^{いだいけ}は暮らしていました。二人の間には一人息子の阿闍世^{あじゃせ}がありました。

ある時、お釈迦さまの従兄弟である提婆達多^{だいばだつた}にそそのかされ、阿闍世は王位を奪うため、父である頻婆娑羅王を牢獄に閉じこめ餓死させようとし、しかし、韋提希が食べ物を隠して運び、獄中の王は生きながらえます。そのことを知った阿闍世は怒り狂い、母である韋提希も幽閉してしまいます。

幽閉された韋提希は、悲しみと憂いのなかで、耆闍崛山^{ぎしゃくっせん}におられるお釈迦さまに向かい、仏弟子との面会を請いました。その思いに応じて、仏弟子とともにお釈迦さまは韋提希の前に現れます。その姿を見た韋提希は、身につけていた装飾品をかなぐり捨て身を投げだして、号泣して訴えます。

「わたしに過去になんの罪があって、このような悪い子を生んだのでしょうか。お釈迦さまはどうして、息子をそそのかすような提婆達多と親族なのでしょう。」

その韋提希の言葉にお釈迦さまは何も答えません。



事件のなかで、どこまでも自らの立場を守ろうとし、物事の責任や理由を他に転嫁しようとする韋提希のあり方があきらかにされます。

それは韋提希だけのあり方でしょうか？

何も答えないお釈迦さまの沈黙を通して、韋提希は我が子が起こした問題はその子だけの問題ではなかったのではないかと自問し、次第に自らの罪を自覚していきます。そして、自らの都合や思いによって互いに傷つき背きあいながら生きるすべての者がともに救われていく世界を韋提希は願い、お釈迦さまはその韋提希の要請に応え、教えを説かれるのです。

我いま極楽世界の阿弥陀仏^{みもと}の所に生まれんと^{ねが} 楽う。唯^{やや}、願わくは世尊^{しゆい}、我に思惟^{しゆい}を教えたまえ、我に正受^{しょうじゅ}を教えたまえ。 『仏説観無量寿経』

3 『観経』には何が説かれているの？②

かんそう しょうみょうねんぶつ
観想と称名念仏

阿弥陀仏の極楽浄土に生まれたいと願う韋提希に対して、お釈迦さまはどのようなことを説かれたのでしょうか？

お釈迦さまは、極楽浄土に往生するための十六の^{かんぼう}観法を説かれます。この十六の観法のうち、前十三観を「^{じょうぜん}定善」といい、後三観を「^{さんぜん}散善」といいます。

定善…心を静かに落ち着け、雑念を払い、浄土のありさまや仏の相^{すがた}を思い浮かべること
散善…心が散乱した普段の生活の中で、悪をやめ善を修めること

「定善」では、阿弥陀仏の浄土や仏・菩薩を^{かんざつ}観ずる^{かんざつ}観察の方法（十三観）が説かれます。「散善」では、人びとがそれぞれの資質や能力に応じた修行により浄土に往生する様子（三観）が説かれます。

『観経』は、古く中国において、自らの力によって精神を集中し心を静寂に保ち続ける修行のなかで、仏の姿と浄土のありさまを心に^み観る^{かんざつ}観想の念仏を説く^{かんざつ}観経であると解釈されてきました。

しかし、七高僧のお一人である善導大師は、『観経』の最後に「汝^よ好^{ことば}くこの語^{たち}を持て。この語を持てというは、すなわちこれ無量寿仏の名^{みな}を持てとなり」と説かれることに着目されます。『仏説無量寿経』に説かれる阿弥陀仏の本願に立つならば、『観経』は縁によって生きるすべての人（凡夫）に称名の念仏を勧める^{かんざつ}観経であると明らかにされました。



善導大師（絵像）

上よりこのかた定散^{やく}両門の益^{やく}を説くといえども、仏の本願^{こころ}の意^{こころ}を望まんには、衆生をして一向に専ら^{みな}弥陀仏の名^{みな}を称せしむるにあり

善導大師 『観経疏』

そして親鸞聖人は、お釈迦さまが様々な善行が説かれたのは、自力の善行を修めることが困難なことを教え、称名念仏を勧めるための手立て（方便）であると受け止められたのです。

Q. 仏教の修行というと、どのようなものを思い浮かべますか？

4 お念仏するとどうなるの？

■ むなしくすぐるひとぞなき

『観経』のなかで、韋提希は一つの事件によって、今まで自分がたよりとしていたものがことごとく打ち砕かれてしまいました。

私たちは、これまで積み重ねてきた自分の努力や能力、築き上げてきた周りとの関係などをよりどころとし、時に神社やお寺でお願い事をしたりもします。誰もが何かをたより、何か信じられるものを求めて生きているのではないのでしょうか？

一般的に何かを信じる、信仰するという時には、その自らが信じたことによって自分の願いがかなっていくことを想像します。

自らの善根において信を生ずることあたわず。仏の名を聞くに由^よって信心を起^よこすがゆえに
『教行信証』

しかし親鸞聖人は、信心とは自らの心で起こすものではなく、「南無阿弥陀仏」という仏の名を聞くことによって起こるものだと教えられます。

『観経』では、王舎城の悲劇という事件への具体的な解決策は説かれません。お釈迦さまの教えを聞くなかで、自らの罪を自覚しすべての者がともに救われていく世界を願う韋提希の姿が表されています。その姿こそ、一人の迷い深い人間が阿弥陀仏の本願に出会い、凡夫が凡夫として立ち上がり仏道を歩みだす姿だと確かめられてきました。

「称名念仏」は、自らの心や精神を統一し、仏に一步一步近づいていくような修行とは異なります。いま口に称える「南無阿弥陀仏」は、仏の願いが私たちのうえにはたらきでたものです。どのような自分であっても、どのような人生であっても、ただ念仏するところに仏の願いはすでに私のうえに成就してあるのです。

お念仏とは私たちの願望を満たす手段や道具ではなく、悩みや苦しみを抱きながらも、お念仏申すところに自分の都合や思いを超えて、すべての存在と共なる自己であったと、他者と出あっていく道がひらかれてくるのではないのでしょうか。

名号^{みょうごう}を称^{しょう}すること、とこえ、ひとこえ、きくひと、うたがうところ、一念もなければ、実報土^{じつほうど}へうまるともうすところなり。
『一念多念文意』

先師の言葉

お念仏は 讚嘆^{さんだん}であり 懺悔^{さんげ}である (金子大榮)

称えながら聞く念仏 (桐溪順忍)

南無阿弥陀仏

「南無阿弥陀仏」はもともとはインドの言葉で、その言葉に中国の漢字を当てた（音写した）ものです。

「南無」は、古代インドの言語であるサンスクリット語（梵語）の「ナマス（*namas*）」という言葉に由来します。その言葉の意味は「敬い信じてしたが順う」であり、その意味から「帰命」とも訳されます。

「阿弥陀」は「アミターバ（*amitābha*、無量光）」と「アミターユス（*amitāyus*、無量寿）」という言葉に由来します。

「阿弥陀」という言葉には、どのような者も分け隔てなく照らし、一人も漏らすことのない「無量光」と、私たちにいつでも、どのような時でもはたらきかけられている「無量寿」という二つの意味が表されています。

阿弥陀仏とは、無量光・無量寿として表されるように、いかなる時代のいかなる者も「選ばず、嫌わず、見捨てず」掬め取って捨てない「掬取不捨」を誓われた仏さまです。

そのような「阿弥陀仏」を「敬い信じて順います」ということが「南無阿弥陀仏」です。

そして、親鸞聖人は「阿弥陀仏に南無せよ」という仏から私たちへのはたらきかけとして「南無阿弥陀仏」をいただかれました。私が「南無する」に先立って、仏の方から「南無せよ」とはたらきかけてくださっていると教え示されています。

ほんがんしょうかん ちよくめい
(本願招喚の勅命)



六字名号（ご真筆）

『正信偈』の冒頭には、「南無阿弥陀仏」とお念仏申すことと同じ意味の言葉が置かれています。最初の二句である「帰命無量寿如来 南無不可思議光」がそれにあたります。

「帰命」と「南無」は同じことを意味し、「無量寿如来」と「不可思議光」はいずれも「阿弥陀仏」のあり方をあらわしています。

日頃『正信偈』をお勤めするとき、「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」とお念仏申すことから始まるところに、日々の生活のなかで仏の願いに立ち帰っていく意義があると思われれます。

第5回 なぜお参りするのだろうか？

1 本堂の荘厳は何をあらわしているの？

■ 阿弥陀仏の浄土



お寺の本堂の畳（外陣）に座り、あるいは家のお内仏（お仏壇）に向かって、手を合わせてお参りされたことがあると思います。その時、本堂の内陣（ご本尊が安置されている場所）やお内仏の姿や形にどのような印象を持たれたでしょうか？

柱や壁などに金箔が施されていてとてもきらびやかな空間、様々な彫り物や装飾のされた非日常の場所といった印象を持たれたこともあるかもしれません。

お寺の本堂や家のお内仏は、生活の中でお参りをする場として大切にされてきました。では、そこには何が表現されているのでしょうか。

浄土真宗の本堂・お内仏の荘厳（ご本尊を中心としたお飾り）は、本来、姿や形を超えた阿弥陀仏の浄土を私たちの目に見えるようにあらわされたものです。

「浄土三部経」のひとつである『仏説阿弥陀経』は、毎月のお月参りで読まれることもあり、『阿弥陀経』『小経』とも呼ばれ、真宗門徒にとってなじみ深いお経です。

『阿弥陀経』には、阿弥陀仏の極楽国土のうるわしい姿が説かれ、その国に往生するために阿弥陀仏の名号を心にとどめることが示されます。そして、六方（東西南北上下）の数限りない諸仏が勧め護ってくださることが説かれています。

2 『阿弥陀経』には何が説かれているの？

くどくしょうごん しょぶつごねん
功德莊嚴・諸仏護念

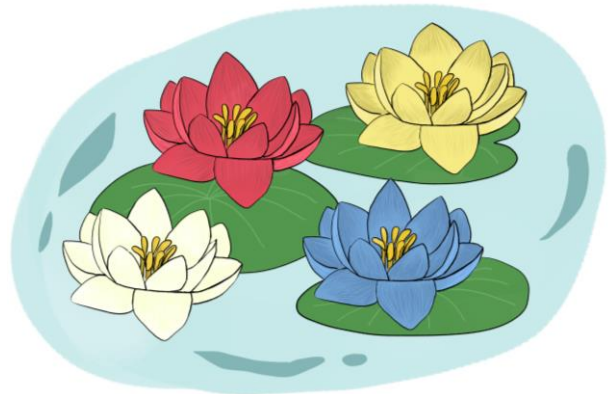
『阿弥陀経』には、阿弥陀仏の国土である浄土が「極楽」という言葉であらわされ、続いてその極楽国土のあり様がつぶさに説かれています。

これより西方に、^{さいほう} 十万億の^{じゅうまんおく} 仏土を過ぎて、^{ぶつど} 世界あり、名づけて極楽と曰う。その土に仏まします、^{あみだ} 阿弥陀と号す。いま現にましまして法を説きたまう。舍利弗、かの土を何のゆえぞ名づけて極楽とする。その国の衆生、^{しゅじょう} もろもろの苦あることなし、^{ただ} 但もろもろの楽を受く、かるがゆえに極楽と名づく。 『仏説阿弥陀経』

『阿弥陀経』にあらわされる極楽国土は、^{こん こん るり} きらびやかな種々の宝（金・銀・瑠璃・^{はり} 玻璃・^{しゃこ} 磔磔・^{しゃくしゆ} 赤珠・^{めのう} 瑪瑙）で飾られ、池には不可思議なはたらきを持った水が満ち満ち、底には金の砂が敷き詰められています。池の中の蓮の花は、青、黄、赤、白、それぞれの色で光り輝き、清らかに香っています。そして、天の音楽が奏でられ、大地は黄金ででき、天から昼夜六回にわたり華が降り注ぎます。

また様々な珍しい鳥たちが美しい声でさえずり、尊い教を説いています。

そよ風が宝の樹や宝を連ねた網を吹き動かし、何とも言えない美しい音を出しています。その声や音を聞いた人たちは自然に^{ぶつ ほう そう} 仏・法・僧に帰依する心をおこすのです。



そのような阿弥陀仏の国に生まれようと願うならば、阿弥陀仏の名号「南無阿弥陀仏」を心に保ち忘れないこと（執持）が教えられています。

^{ごうじゃじんじゆ} 恒沙塵数の如来は ^{まんぎょう} 万行の少善きらいつつ
^{みょうごう} 名号不思議の信心を ^{ひとしくひとえ} ひとしくひとえにすすめしむ 『浄土和讃』 弥陀経意

そして、東方・南方・西方・北方・下方・上方と、六方の世界に数えきれないほど多くの諸仏がおられ、それぞれの国で真実を説き、阿弥陀仏のはたらきをほめ讃え、その阿弥陀仏の国に生まれることを護り勧めてくださっていることが説かれています。

^{じっぽうごうじゃ} 十方恒沙の諸仏は ^{ごくなんしん} 極難信ののりをとき
^{ごじよくあくせ} 五濁悪世のためにとて ^{しゅうじょう} 証誠護念せしめたり 『浄土和讃』 弥陀経意

3 本堂ってどんな場所だろう？

念仏の道場

浄土真宗のお寺の本堂の様子を思い返してみると、どのような荘厳（お飾り）がされているでしょうか。

本堂の中央には阿弥陀仏（御本尊）が安置されています。浄土の世界を表現する本堂が、阿弥陀仏を中心として成り立っているということです。

御本尊の前に置かれた燭台（鶴亀）や花瓶などの仏具は金色に装飾され、本堂により違いはありますが、内陣の柱や壁なども金色に装飾されています。

お参りの際には灯明を灯し、花瓶に四季の花を立て、香炉に香をお供えします。



名古屋別院 中尊

本堂の荘厳（お飾り）を通して、阿弥陀仏の浄土が清浄にして歡喜にあふれ智慧に満ちた世界であることが、私たちに伝えられているのです。

また、阿弥陀仏を真ん中にして左右に様々な方の絵像などが掛けられています。真宗大谷派 名古屋別院の本堂には、向かって右側に、親鸞聖人・聖徳太子・七高僧、左側に、蓮如上人・歴代御門首のお軸が掛けられています。



名古屋別院 南余間（向かって左側）



名古屋別院 北余間（向かって右側）

そこには、お釈迦さまからインド・中国・日本という時代や社会を越えて、阿弥陀仏の本願を信じ、お念仏申してきた数限りない先人の歴史があらわされています。

本堂に参るなかで、本願念仏の教えを受け伝え、私たちにまでとどけてくださった方々の歩みをお敬いしてきたのです。

本堂やお内仏にお参りすることは、私に先立つ数限りない方々と出あい、常に仏の智慧に照らされている身とあきらかにされる、大切な時と場をいただくことではないでしょうか。

Q.本堂はどのような人たちが建てたのだろうか？

4 真宗門徒の生活って？

き え さんぼう

■ 帰依三宝

『阿弥陀経』には、浄土に住む人々は仏・法・僧に帰依する心をおこすことが説かれています。

お釈迦さま在世以来、仏・法・僧を三つの宝とし、その三宝に帰依することは、仏教徒の根本のよりどころであるとされてきました。

仏（ブツダ 仏陀）…お釈迦さま

法（ダルマ 達磨）…お釈迦さまの説かれた道理・教え

僧（サンガ 僧伽）…仏の教えをいただく人々の集まり

そして親鸞聖人は、お釈迦さまがよるべき法として教説された阿弥陀仏の本願を信じ、「南無阿弥陀仏」とただ念仏申す生活を、「御同朋・御同行」と敬われた人々とともに歩まれました。

そのお心を受け、真宗門徒は「南無阿弥陀仏」を中心とした本堂やお内仏の前で手を合わせ、ともにお念仏申す生活を伝えてきました。

私たちがお参りをする本堂やお内仏は浄土の相^{すがた}を形どったものです。浄土は私たちの思いや望みを叶えてくれるような世界ではありません。私たちの思いや望みを超えて、誰の上にも平等に成り立つ世界こそ浄土であり、そのような世界を願い続けてきたのが本願念仏の歴史です。

阿弥陀仏の本願を信じ、ただ念仏申せと教えられても、私たちは自らの思いを優先し、素直にその言葉を受けとめることはなかなかできません。それはとても困難なことであり、自分の思いを満たすために仏さまに手を合わせている、それが私たちの姿ではないでしょうか。しかし、私がお念仏申す背景には、自らに先立ってお念仏を申し、その歩みを通して教え勧めてくださっている方々があります。

親鸞聖人をはじめ、数限りない方々がそれぞれの現実のなかで阿弥陀仏の本願に出会い、ただ念仏申す生活を歩まれてきました。そこにはどのような願いがあったのか、これからもお参りをするなかでともに学び訪ねていきましょう。

先師の言葉

前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え （道綽禅師）

拝むとは拝まれて居た事に気付き醒めること （高光大船）

お内仏(お仏壇)

一般に「お仏壇」と称されるものを、浄土真宗では「お内仏」と呼びならわしてきました。

「お仏壇」は、ご先祖を供養するための場所、家内安全を祈願する場所として受けとめられることもあります。が、「お内仏」といただくことは、阿弥陀仏を中心として、自らの日々の生活や人生におけるよりどころ(根本)を朝夕・時々には確かめ立ち返る場として大切にいただかれてきたのです。



① ^{ほん ぞん}本尊
阿弥陀如来立像

② ^{わき がけ}脇掛(右)
歸命盡十方無碍光如来(十字名号)
又は、親鸞聖人の御影

③ ^{わき がけ}脇掛(左)
南無不可思議光如来(九字名号)
又は、蓮如上人の御影

④ ^{しゅみだん}須弥壇
本尊を安置する壇。

⑤ ^{くう だん}宮殿
須弥壇の上に本尊を安置する仏殿。

⑥ ^{かしゃごうろ}火舎香炉
焼香をするもの。

⑦ ^{け びょう}華瓶
水を備える器。密又は青葉をさす。

⑧ ^{つる かめ しょくだい}鶴亀(燭台)
蠟燭を立てるもの。点さない時は朱の木蠟を立てておく。

⑨ ^{か ひん}花瓶
生花を用い、四季折々の花をさす。

⑩ ^{どごうろ}土香炉
毎日のお勤めの際に線香をたく。線香は立てず、折って横にしてたく。

